

---

# 県北地区における透析患者の通院現況

渡辺純一、草野実千也、斎藤勝彦、松島宏樹、  
駒ヶ嶺 健、大坂和彦、金野秀樹、高谷 浩、  
内藤正樹、斎藤淳嗣、栗山 豊  
県北透析従事者交流会

## A Study of dialysis in Akita north area

Junichi Watanabe, Michiya Kusano, Katsuhiko Saitoh  
Hiroki Matsushima, Ken Komagamine, Kazuhiko Ohsaka  
Hideki Konno, Hiroshi Takaya, Masaki Naito  
Junji Saito, Yutaka Kuriyama  
Association for dialysis Technologists in Akita north area

### <緒 言>

近年高齢者の透析導入患者の増加や、長期透析による高齢化、合併症の発症等により介護を必要とする通院困難な要介護患者が増加傾向にある。<sup>1)</sup>今回県北透析交流会では県北地区で透析を施行している患者の通院状況の実態を把握するため調査をおこなった。

### <対象と方法>

秋田県県北地区、能代市から鹿角市まで医療圏13市町村と思われる8施設の透析患者338人(血液透析患者317人、腹膜透析患者21人)を対象とした。

それらに対し平成13年11月末時点で、年齢、通院距離、通院時間、通院手段、入院状況等に対するアンケート調査を行った。

### <結 果>

#### <年齢>

透析患者の年齢別割合は、50才代から70才代が多く全患者数の約70%を占めていた。この結果は秋田県全体の調査結果と同様の傾向を示した。(図1)

#### <距離>

自宅より透析施設までを示す通院距離は5 km未満が最も多く135人、次いで15 kmから20 km未満が66人であった。30 km以上からの通院距離も18人。

今回の調査で、県北での最高通院距離は65 kmからの通院であった。(図2)

#### <時間>

通院距離に伴った通院時間ですが、30分以内が237人と最も多く、次いで60分以上90分未満が8人、90分以上の通院時間は0人であった。(図3)

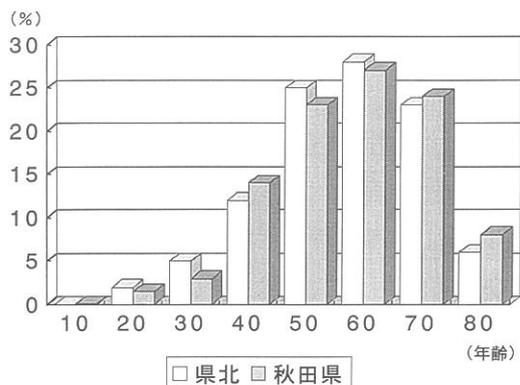


図1 年齢別患者数割合

透析患者の年齢別割合は、50才代から70才代が多く全患者数の約70%を占めていた。この結果は秋田県全体の調査結果と同様の傾向を示した。

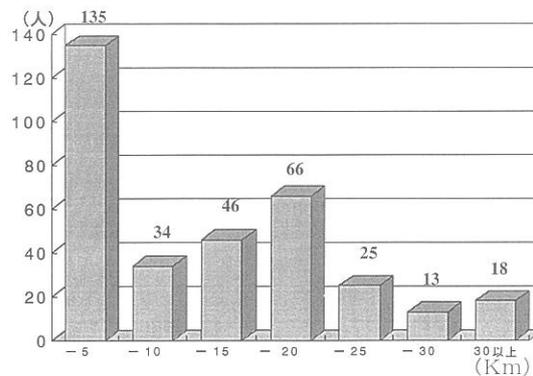


図2 透析患者の通院距離

自宅より透析施設までを示す通院距離は5 km未満が最も多く135人、次いで15 kmから20 km未満が66人であった。30 km以上からの通院距離も18人。

今回の調査で、県北での最高通院距離は65 kmからの通院であった。

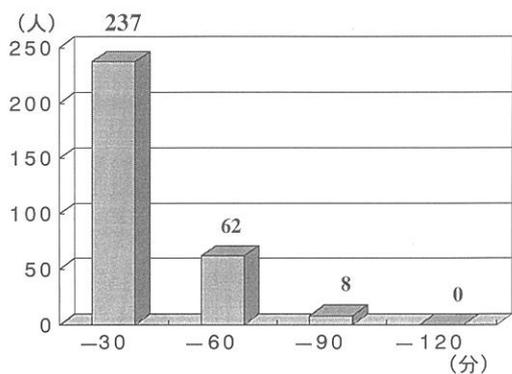


図3 通院時間

通院距離に伴った通院時間ですが、30分以内が237人と最も多く、次いで60分以上90分未満が8人、90分以上の通院時間は0人であった。

### <通院手段>

自己通院患者における通院手段では自家用車が132人、バス19人、徒歩14人、自転車2人となった。ほとんどの自己通院患者が自動車を利用していた。(図4)

要介護患者の通院手段は家族の介助が61人、民間サービスによるものが19人、社会資源による公的な社会福祉協議会の送迎サービスを利用しているものが7人となった。(図5)

### <入院状況>

11月末現在入院している患者数は、36人おり、その内訳は、疾患において入院している患者30人、通院介助の不在や一人暮らしのため社会的入院を余儀なくされている患者4人、他2人については老人施設からの通院送迎であった。(図6)

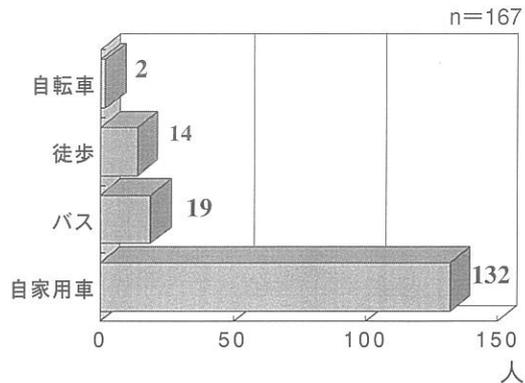


図4 通院手段（自己通院）

自己通院患者における通院手段では自家用車が132人、バス19人、徒歩14人、自転車2人となった。ほとんどの自己通院患者が自動車を利用していた。

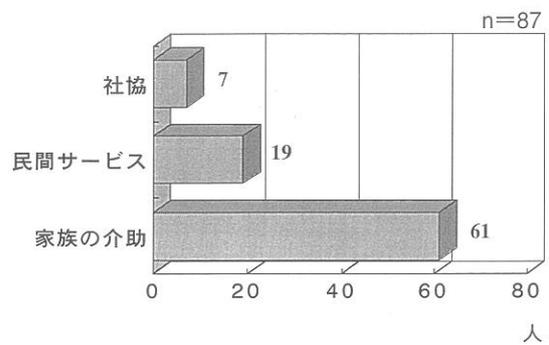


図5 通院手段（要介護）

要介護患者の通院手段は家族の介助が61人、民間サービスによるものが19人、社会資源による公的な社会福祉協議会の送迎サービスを利用しているものが7人となった。

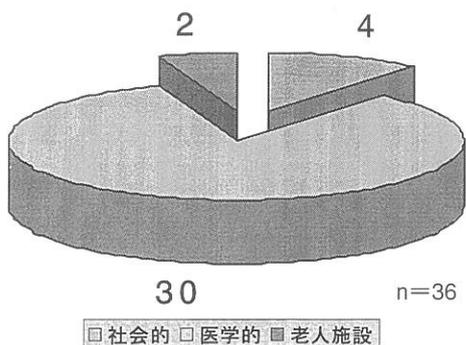


図6 入院患者状況

11月末現在入院している患者数は、36人おり、その内訳は、疾患において入院している患者30人、通院介助の不在や一人暮らしのため社会的入院を余儀なくされている患者4人、他2人については老人施設からの通院送迎であった。

### <考 察>

将来において透析患者の高齢化が進み、糖尿病骨障害等の合併症をもつ患者が増え、自力通院不可能なケースが増え続けると考えられる。秋田県、特に県北地区は山沿いの市町村であり、透析施設までは、約4割の患者が20km以上の通院が必要となっていた。自家用車での通院が多い為か、通院時間30分以内の患者が7割以上占めていたが、しかし今回の調査は11月末時点のものでありこれから冬季になるともっと延長されるものと思われる。今回の調査では県北地区での社会的入院は4人となっているが、冬季になると、通院時間の延長、家庭での問題（介助者の不在）等により入院が必要となる患者は多くなる。

透析患者の多くは在宅での生活を望んでいると思われ、調査結果の如く高齢者には家族の協力が必要となり家族の負担が大きくなる。透析スタッフは家族への精神的な援助を含め、各自治体の通院補助事業のサービス、あるいは民間サービスの内容を知り、必要に応じ情報の提供をしていく必要があると考える。患者、家族、病院の連帯強化を図ることが重要と思われる。<sup>2)</sup>

---

参 考 文 献

- 1) 畠山喜恵子、中村智代子、山口裕一、木下康通：退院困難な患者の在宅へ向けての家族への支援、臨床透析、14、1701-1706、1998
- 2) 金内雅夫、土肥和紘：高齢維持患者の社会的入院、奈医誌、47、243-247、1996